
藍色の空

河灯 良平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍色の空

【Zコード】

N4976D

【作者名】

河灯 良平

【あらすじ】

結婚生活がすれ違つて行く夫婦、その先に待つものとは……

結婚生活が長くなるに比例して、僕と彼女の距離も離れていった。

僕の仕事の多忙さが、原因だろうか。

兎に角、彼女には罪はない。

暗いリビングで一人、晩酌をしながら寂しく、思いにふける。

グラスの中のウイスキーを、一気に流し込む。

とろりとした黄金色の液体が、僕の喉を焼きながら胃へと流れていいく。

アルコールが体に回っていくのに伴って、古い記憶が僕の体を駆け巡る。

妻の順子と出会ったのは、大学のキャンパスだった。

大阪の大学で、同じゼミを受講していた私たちは、お互いに惹かれあい、そして当然の様に交際が始まった。

初めてのクリスマスは、僕が背伸びして高級なフランス料理のレストランを予約したが、お互い不慣れな場所だったので、作り笑いをするのが精一杯で味は分からなかつた。

しかし、私たちは幸せに包まれていた。そして僕たちは、初めて一つになつた。

小さいなごこちはあつたが、交際は順調だった。

特に問題なく大学を卒業し、周りの友人たちと同じように就職した。

僕らは同じく、東京の企業に就職することになった。

僕は唯一内定をもらつた企業が、東京であったのが、上京の理由であつたが、順子が東京の企業に就職したのは、僕と離れたくないからだつたのだろうか。

僕は真相を知らない。これは順子本人しか分からないことだ。

東京に移り住むと同時に、僕たちは同棲を始めた。彼女の両親は渋い顔をしたが、僕と彼女の必死の説得が功を制し、最後は快く送り出してくれた。

お互の仕事は至つて順調だつた。休日には近所の公園まで一人で手をつなぎ、散歩をした。

変化が起きたのは、僕たちが上京して一年目のことだ。

順子が妊娠したのだ。

彼女の報告に僕は、激しく動搖したが、心の底から感動した。そして、二人で抱き合つて泣いた。

産まってきた我が子は、三千グラムの女の子。母子ともに至つて健康だつた。

家族が増えた事に、僕は感動して泣き、そんな僕を見て順子は笑つた。

娘には、一人で悩み抜いた結果、産まれた日の空が美しい青色だつたのと、皆から愛されて欲しいとの意味を込めて、「藍」と命名した。

僕は家族の笑顔を絶やしたくなくて、必死に働いた。

その甲斐があつて、僕は出世し収入も増えた。

僕はこの時に、気づくべきだつたんだ。

この頃から、家族を以前ほど見なくなつた。

順子との会話が減つた。

娘と遊ばなくなつた。

家族の繋がりが希薄になつてなつてしまつた。

薄々気づいていたが、こんな風になつたのは自分のせいだと思いつくなかった。

だから、家族の為だからと言い続け、働いた。

そして……

冷蔵庫の製氷機が氷を作る音が、ゴトッとして、僕は現在に引き

戻される。

長い間、回想していたように思えたが、時計の針は五分ほどしか進んでない。

グラスを机に置き、僕は立ちあがる。

その時、机の上に置かれている紙に気付く。

それは、娘の授業参観の知らせだった。

参観日の日付は明日。

去年までは、参観に来るよう順子に言われていたが、今年はついに言われもしなくなってしまったか。

その原因是、仕事を理由に初めての参観日以来、断り続けていた僕にあるのは、分かつている。

その紙をしばらく見ていたが、同じ場所に戻しへべっどに向かう。

明日も仕事がある。娘の参観には行けそうもない。

僕はベットに潜り込み、胸に何か暗く重いものを抱きながら、眠りについた。

今日の天気は素晴らしい、青く澄みとおつた空には雲一つない。

僕は、自宅から徒歩十五分程に位置する、私立あおば小学校の校門に立っている。

会社には、体調不良と伝え休暇をとった。

娘の学級は三階の一年三組だ。

教室の扉を開けると、すでに授業は始っていた。

僕のドアを開ける音を聞いて、一瞬、教室の全員が僕に注目する。

その中にもちろん、娘もいた。

娘は僕の顔を見ると、満面の笑みを浮かべ、ほんの小さく手を振る。娘の笑顔を見た瞬間、胸が熱くなるのを感じた。

今度は視線を教室の後方に移すと、多くの保護者の中に、驚きの顔を隠せずにいる順子がいた。

僕は素早く、彼女の横に移動し、肩を並べる。

彼女の顔を見つめ、彼女も僕の顔を見つめたが、彼女は笑つてくれなかつた。

授業は進み、娘が算数の問題に何度も答えた。

その姿を見て、娘が急に大きくなつたように感じた。それほど、僕は口ごもる娘を見ていなかつたのだろう。

授業も終盤になり、恰幅が良い担任の先生が、保護者に挨拶を始める。

そう言えば、担任の先生を今まで知らなかつたことに、気づく。一体僕は娘の何を知つていいのだろうか。

先生は、今日参観に来た保護者に、礼を述べ、頭を下げる。

そして、後ろに張つてある絵は子供たちが自分の両親を書いたのですよ。と先生は言つた。

一同は振り返り、僕は急いで藍の名前を探す。

僕が名前を見つけるのと同時に、順子も名前を見つけたみたいだ。

僕らは見つめ合い、ほほ笑んだ。

そこには、クレヨンで美しく彩られた僕と順子が手を繋ぎ、笑つてゐる絵があつた。

「なあ、順子。お前が東京に来たのは、俺が東京の企業に就職したからなのか？」

僕は順子にたずねる。

「そんなのこと、今まで気づかなかつたの？　まったく呆れるわ」

少し前を娘と歩いていた順子は足を止め、振り返つて言つた。

「今までの事は、俺が悪かつたと思ってる。本当にすまない」

それを聞いた順子は俯き、そして顔をあげて、僕の顔をしつかりと見つめた。

「全てあなたせいではないわ、私にも悪い所はあつたの。これは家族の問題よ」

そう言つた順子の目からは、涙がこぼれていた。

僕は目に溜まった涙をこぼすまいと、上を向く。
そこには雲一つない、藍色の空が広がっていた。
僕らは、昔一人でよく行っていた公園を、手をつないで通り過ぎ
ていく。

三人で。

(後書き)

今回も短編ものを書かせていただきました。
皆様の「意見」「感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4976d/>

藍色の空

2010年10月8日15時18分発行